



が、本場ブロードウェイから来たスタッフや出演者たちとのウエルカムパーティーを手伝い、大きく運命が動く。「私は背中が大きく開いた服を着て、カウンターの中で飲み物を作って出していたんです。そしてらブロードウェイの人が、キミ、明日からお稽古に入りなさいって」

誰もが驚く声かけの理由は、彼女の背中にあった。

「背中の筋肉を見れば、どれだけダンスをやっているのかわかるからって。ところが周囲からは嫉妬の嵐(笑)。多分いい気になってたんでしょね、研究生のくせに稽古場での礼儀がなくてないと目の敵にされて」

コーラスラインの稽古の最中に、研究生として最後の面接があった。四季の代表である浅利慶太氏に「お前、態度が悪いぞ。それを謝らないとクビだ」と言われ、「まだ故郷に錦も飾ってないし、これは謝った方がいいと思ったので、ひたすら頭を下げました(笑)」

以来、劇団中で鎌田真由美はとんでもないヤツだと思われるように。彼女は思ったことをストレートに口にする。そのストレートさの評価は分かれると

ころで、正論を好まないタイプや何か含むところのある人には敬遠される。

そして『コーラスライン』の初演に鎌田の名前はなかった。

「池袋での再演のときに出してもらえませんでした。頭の15分で終わる役でしたけどね」

そんな彼女だったが、ダンスの力だけは誰もが認めるところになる。24歳で初演『キヤッツ』のオーディションに合格しオリジナルキャストとなり、その後も様々な公演のダンスキャプテンやダンススタッフを務める。

「その頃いつも、もつと日本のミュージカルのレベルをあげないといけないと思っていて、一方で、自分はトップのプレイヤーになる才能はないと自覚し始めたんです。なりたいのは振付家だった」

彼女は振り付けをするだけではダメだと考えた。もつと芝居を勉強しなければいけない、と。

「ステップだけがダンスではなく、音楽と感情を視覚化し、日常の自然な動きからステップを作り出せる、そんなミュージカルの振付家になりたい。そのためには『コーラスライン』の